

## 第 1 回羽田空港機能強化に関するコミュニケーションのあり方アドバイザリー会議 議事要旨

日時：平成 27 年 3 月 16 日（月）18:00～19:30

場所：中央合同庁舎 3 号館 10 階共用会議室

### 1. アドバイザリー会議の設置について

- 事務局より、資料 1 「『羽田空港機能強化に関するコミュニケーションのあり方アドバイザリー会議』の設置について」を説明。
- 屋井委員を座長として選出。

### 2. コミュニケーションのあり方の基本的な考え方について

- 事務局より、資料 2 「羽田空港機能強化の検討の経緯」、資料 3 「コミュニケーションのあり方の基本的な考え方」を説明。
- 各委員からの主なご意見は、以下のとおり。
  - ・ 住民参加のプロセスにおいては、「公平性」と「効果的」の両軸を考えながら進めていくことが重要。「公平性」とは、プロセスや情報開示、参加メンバーが公平であること、「効果的」とは、時間管理を適切に行うこと。
  - ・ 双方向の対話を通じて何をやるのかという点について、「住民の多様な意向を踏まえた上で、環境影響に配慮したきめ細かい方策を模索する」というようにより詳しく示してはどうか。
  - ・ 今回の住民との対話においては、プラス面とマイナス面、言い換えると、効果と影響の両方を考え、対話することが大切。大都市に住んでいる以上、両方に向き合わなければいけない。

### 3. コミュニケーションの具体的手法

- 事務局より、資料 4 「コミュニケーションの具体的手法」を説明。
- 各委員からの主なご意見は、以下のとおり。  
(手法について)
  - ・ コミュニケーションについては、「何を、誰に、どうやって」という 3 つの組み合わせを考える必要がある。メディアについては、ラジオは、テレビや新聞と比べて比較的 low コストで、意外と聞いている人も多いため、取り入れてはどうか。
  - ・ 手法には、一方向型、双方向型、参加型があり、コミュニケーションは、様々な手法を組み合わせることでより効果的になる。
  - ・ 教室型の説明会などでは、「意見を言いたくても言えない人」も出てしまうため、設計に配慮が必要。双方向型、参加型の重要なところは、

行政と住民がお互いに情報や感覚のずれを確認できること。ずれを確認することで、よりよい情報提供や議論ができる。

- ・ オープンハウスは、アメリカなどでよく使われる手段。知りたいことをフェイス・トゥ・フェイスで聞ける機会を多くの方に提供できるため、今回、重要なものとなる。一方で、オープンハウスでは市民同士の深い議論が生まれにくいいため、空港に近いところなど影響の大きい地域においては参加型ということにもなってくるだろう。
- ・ 住民との対話については、国と自治体が一緒に体制作りをし、考え方を共有して進めることが必要。
- ・ 提供する情報の内容や方法など一連のプロセスについては、まずは大枠から決め、ステップバイステップで組み立てながら進めていくといいのではないか。

(提供する情報について)

- ・ リスクについて、専門家は数字や論理で説明するが、一般の方には理解できない場合も多い。専門家と一般の方とが共有できるイメージを作り、一般の方にそのイメージで理解してもらうことが大切。また、リスクはゼロにはできないので、「ミニマイズする」という考え方を伝え、共有していくことが必要。その上で、どういう手法で安全を担保していくのかを説明することが重要。
- ・ リスクなどマイナスの側面については、自ら出していくという姿勢でコミュニケーションしていくことが必要。また、なぜ機能強化が必要かというプラスの側面についても、一般の人に響くような言葉で、すぐに腑に落ちる形でコンテンツを作るというのが今後の課題だろう。

#### ○ 座長によるまとめ

- ・ 大前提として、より多くの方々に羽田空港の機能強化について知ってもらうため、最大限努力するということが必要。
- ・ 影響の大きさも鑑みて、適切な場所、適切な手法、適切な期間で、住民との対話をきめ細かく、双方向で行っていくことが必要。そのための手法として、オープンハウスは有力なもの。
- ・ 提供する情報について、リスク、安全の問題については最初から出していくことが重要。
- ・ プロセスについては、ステップバイステップで対話を進めていくことが重要。

#### 4. 今後の進め方

##### ○ 事務局より、次回会議について以下のとおり説明。

- ・ 次回は具体的な手法等についてさらに掘り下げた議論を行う予定。
- ・ 頂いた意見については、事務局にて検討・整理を行い、次回会議にて示したい。